

読売新聞社賞『道を拓く～科学という夢に向かって～』中島 里菜

『科学の力で世界に貢献する』これが私の志だ。

今年の5月上旬にアメリカで開かれた高校生の科学研究の世界大会に、私は日本代表として出場した。入賞できるのは出場者の約2割にも関わらず、物理学・天文学部門で世界4等賞を受賞することができた。英語での発表で、大半の参加者が会場でのプレゼンテーションなのに、日本からはコロナ禍の影響でオンライン参加というハンディキャップがある中、世界の第一線で活躍されている研究者である審査員に認めてもらえたのはとても嬉しかった。そしてその結果により文部科学大臣表彰を受けることができ、大変光栄に思った。だが喜び以上に、上位の賞に輝いた研究のレベルに圧倒されたのも事実だ。受賞者の多くは、自分の手で社会をよりよくするため、自然の謎を解き明かすため、一流の研究者に負け劣らない努力と成果を有していた。

世界大会に出て、私は自分の志について今一度考えさせられた。研究関連の仕事に就きたいと思っていたが、私はどこまで本気なのか、「研究する自分」に満足していただけないのかはないのかと。考えるうちに思い出したのが研究テーマを考えついた時のぞくぞくする気持ちと実験で研究対象の現象に向き合っている時の恍惚だ。私にとってそれは本物だった。他の研究者にも絶対に負けない自信がある。だから私は科学研究に携わっていきたいともう一度心に決めた。そして、より広い世界で揉まれない、学びたい。将来的には世界で活躍している研究者の仲間入りをしたい。そんな衝動が沸いてきた。

私のこの思いは新島襄と共通する部分があると思う。彼の人生の中で私が一番好きなエピソードは、新島襄が法を犯してでも世界に出ていったことだ。海外生活のあてもないのに、封建社会の日本を変えたいと渡航した彼の決断を私は尊敬する。さらに新島襄は脱国前から、蘭学や英語の学習機会を得るために自分から行動している。国内でも国外でも新島襄が多く親切な人に支えられたのは決して偶然ではないと思う。彼の学びへの熱意、学びに対する謙虚な姿勢が道を拓いたのだろう。意志あるところに道は開ける。まさにこれを体現したのが新島襄だ。

新島襄は閉ざされた社会の中で世界に憧れ、自力で乗り出していった。今は密出国をしなくてもオンラインで世界と繋がる時代なので、新島襄の驚きとはまったく違うかもしれないが、私は世界のレベルに触れて、それに圧倒された。私の再挑戦はここからだ。今の私にできるのは志を持ち続け、ひとつひとつ学んでいくこと。科学の研究は豊富な知識とそれを正しく使えることが、新たな発見・人類への成果の土台となる。日々の勉強を疎かにしにしてはならない。さらに世界で渡り合えるように、高い英語能力、日本文化への造形、世界の歴史への理解というように文理を問わず教養を身に付け、中身のある人間になる。そして機会を得たら、新島襄のように臆することなく未知の世界へ飛び出していこう。